海外だより

イギリス人の生活感覚

社会保障研究所　小　林　良　二

イギリスに住んだり訪問したことのある人々がその印象を問われて，「確かにイギリスは経済的には落ち目であるが，植民地時代に貯えた蓄積があるから，割合いゆったりしていられるし，人々の態度にも余裕がみられる」と言った評価を下しているのを，よく耳にする。筆者もまた2年近くの滞英生活を通してこのことを実際に見聞きしたのであるが，細かい事実の穿鑿――どの地域のどの様な階級の人々にどの程度そうした態度がみられるかという点――は措くとしても，何かそうした説明だけでは割り切れないものを感ずるのである。

この割り切れなさは，筆者が滞英中よく接していた英国人に対しても感じていたのであるが，ここではそれが典型的に見られた事例を紹介して，問題の糸口とすることにしたいと思う。

第1の例は，筆者がイギリス南西海岸のコーンウォール地方に旅行した時のことである。コーンウォールは大西洋とドーヴァー海峡に面するイギリス南西端の半島部であり，海岸の美しさ，気候の温暖さ，空気の新鮮なことなどの理由で，イギリスでも屈指の保養地である。今年のイースター休暇に家内とこの地方に行く計画をたて，イギリスで大変よく知られているBed and Breakfastという安い民宿を探し，そこに何泊かしたことがあった。こうした民宿では夕食後（Bed and Breakfastでも頼めば夕食を出してくれるところがある）よく客を居間に招いて会話を楽しむのであるが，我々もまたくつろいだ感じの居間でテレビを見，お茶をごちそうになりながら，この宿の主人夫婦と話をする機会を得たのであった。話しが進んで，いつこの土地に来て，この様なBed and Breakfastを始めることになったか，という話題になったのであるが，40才位のこの主人の説明によると，結婚してしばらくは北ロンドンのある会社で技術関係の仕事をしていた。しかし5年程前にロンドンでの生活が退屈になり，環境もあまり良くなかったので，その会社を退職し，この家を買って移り住んだのだと言う。住んでみると環境等は極めて良いし，ロンドンに行こうと思えば車で6，7時間かければ出られる。経済的な面では，夏場は海水浴のできる砂浜が近くにあり，最盛期には，13人位まで客を泊めて稼ぐ，シーズンオフはぽちぽち客が来るだけで，特に冬場にはほとんど客がない。しかしこの時期には失業手当がもらえるから夏場での稼ぎと合わせれば十分維持できる，とのことであった。イギリス人が混雑する都会生活を嫌うことは，我々の比ではないのであるが，経済的にはそれほど贅沢できないとしても一定の生活の基礎――ここでは失業手当を含めて――があれば，むしろ退屈な（boring＝うんざりする＝という言葉をイギリス人は特徴的に用いる）都市生活に見切りをつけ，脱出を企てるという点に強い印象を受けたのである。

紹介するもう一つの事例は，筆者が席を置いていた，ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスでのことである。指導教官が約束の時間に現われず，しばらく隣の部屋で待たされることになった。そこへ同じゼミナールに属している学生がやってきて，彼も待つことになり，いろいろな学生生活の状況を聞くことになった。話題が将来の抱負に及んだ時に彼は次のように答えたのである。“僕は将来大学で研究生活を送りたい。労働運動の歴史について研究するつもりだ。現在は，大学を始めとする研究者のポストを得るのが大変難しいことはわかっているが，ミニマム・ウェルフェア・コンディション（という表現をこの学生はしていた）さえあれば，現在の生活を続けてゆく予定である”とイギリスの学生の大多数は，政府からの奨学金で生活しており，その額は決して多いものではなく，休みにはアルバイトをしたり，補足給付（Supplementary Benefits）を受けたりしているわけで，決して楽ではない。彼らの着てい

る服装を一目みただけでそれがわかる。そうした学生の口から，経済的に富裕になることよりも，むしろ自分の好きな生活をしたい，その為には若干の経済的困窮は今のところ構わない，という話を聞き，我々の感覚とは随分ちがうなとと思ったのであった。

こうした事例によく似た話を筆者はイギリス滞在中に比較的よく耳にし，何か我々のもつ感覚と異質なものを感じとっていた。イギリス人はあまり働かない（とイギリス人自身が特殊なニュアンスをこめて言うのであるが）とはよく言われることだし，また事実彼らが働いているのを見ると，どうみても効率的であるとは思われない。日本から行った当初は生活のスピードの遅さに大分いらいらもしたのであるが，しかし，何カ月か住んでいるとその中に何か別の意味があることに気づいてくるのである。そして，彼らの生活態度には単に〝働かない〟ということだけでは済まされないなにものかがある，と思い始める。

前にあげた２つの事例をみると，それらに共通して言えることは，彼らがある程度経済生活を犠牲にしても，あるいは一定の経済的裏づけさえあれば，経済よりもむしろ，生活の質あるいは，意味のある生活，を意識的に選択している，という点であろう。何が意味のある生活であるか，ということは勿論，個人によって異なる。各々が自分で自分の生活の意味をみつけてゆく，という点では，イギリス人はきわめて明確な態度を持っている。さて，しかしそれをどこに見い出すか，ということになると，多くの問題が出てくることになる。彼らの中には，そうした生活を実現しうる可能性は，industry，従って又都市生活の中では少ない，industry は boring（退屈）で，dirty（きたない），という考え方が強い様であり，それが子供達の場合には増幅されて出てくる。勿論これは，年齢・階級・身分・地域など，様々な条件によって大いに異なるであろうし，全部がそうだというのではない。しかし，それを考慮に入れた上で，やや大袈裟な言い方を許していただけるならば，何かそこに，市民社会の爛熟という問題が潜んでいると思われるのである。

このことを考える上での素材をもう一つ提供しておこう。経済的な地盤沈下がポンドの急激な下落に気の毒な程はっきりと現われ，インフレのひどい昂進，失業率の増大と相俟って，経済面での明るいニュースがおよそみられなかったここ２年間のイギリスであったが，そうした状況の中でこの４月に，〝New Society〟という週刊紙が，「イギリス人は本当に裕福になりたいと思っているのか？」という題の調査記事を載せ，その内容が日刊紙にもとりあげられ，時期が時期であることもあって，かなりの反響を呼んだのである。読者のどなたかは既に御承知であるかも知れないが，簡単にその内容を紹介してみたい。

結論的には次の２つのことが大切であるとこの報告はいう。

「（イギリス人は）物質的な面ではあまり多くを望まないということが顕著である。ほとんどの人が裕福でありたいと本当には思っていない。大ていの人々は金の面では多くを欲しいとは思わないし，又，期待しているわけでもない。たとえ，より多く（金を）手に入れることができるとわかっていても，大多数はその為に一生懸命働こうとはしない。大抵の回答者は，ただ気持のよい（pleasant）生活ができるに必要なだけ働けばよいと考えている」。

更にもう一つの結論は，

「イギリス人は1973年以来〔この年に，この調査と同じ内容の調査が行なわれている〕生活の標的を下げたように思われる。1977年では，４年前よりも，自分たちの物質的水準に対する満足度が減ってはいるものの，多くの人たちは，自分たちが４年前に要求していたものと同じものを受くるに価しないと考えている。これは，新しい現象であり〔と言って更に皮肉ぽくつけ加える〕，期待水準低落革命とも言うべきものである」（New Society，28 April，1977．P．158）。

この様に調査結果を要約したあとで，更に，自分たちの経済状態が過去５年間どの様に変化し，今後５年間どうなるか，という見通し，将来に対して楽観的か悲観的か，現在十分な生活ができるには更にどれくらいの金が必要であるか。現在の生活水準にどの位困っているか，等々の質問結果を，年齢，階級，性，地域等の差異を折り込みながら紹介したあとで，イギリス人の経済生活水

準への期待が下降したとのべ，シニカルに「この調査の回答者たちは，国は危機に頻してはいるが，自分たちはまあまあのことをしている，と言っていると思われる」と注釈しているのである（ op. cit, p. 160 ）

イギリスが，一応の社会保障の水準に達した国であるのは事実であるが，その保障・サービスが十分であるとは言えないし，国民保健サービスを始めとして，平等化の問題，人種問題，低賃金問題，マンパワー問題等々，問題が山積しており，どれをとっても，短時日で問題がかたづくとは決して思われない。にも拘わらず，イギリス社会のある一面では何か別のロジックが，社会の成り立ちそのものに問題を投げかけていることを感じるのである。

筆者は以前，マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という論文を読んだことがあるが，その中に，伝統主義の勤労観は，1日に必要なものだけ働いて得たら，それ以上は働かないこと。従って，賃金をたとえ2倍，3倍に上げたとしても，より一生懸命働こうとはしない，という点に求められる，とあったのを思い出す。先に紹介した事例及び調査報告を思い出していただこう。彼らは，ある程度の経済的保障があれば，あとは自分の好きなことをしたい，ただ，気持が良い生活ができるに足るだけの金があれば良く，それ以上，働こうとは思わない，と言っているのである。マックス・ウェーバーが近代資本主義発祥の地としたイギリスで，まさしく，伝統主義とも呼べる様な生活意識が，支配的になっているとも言いうるのである。これは，もともと，イギリス人の生活の中に，産業革命にも拘わらず流れていたものが，復活してきたということなのであろうか，あるいは，生活意識の大きな転回があったのであろうか。

この問題を解くには，経済・社会・文化等様々な領域について細かい検討が必要であろう。が，さしあたっては，1949年に，T.H.マーシャルが鋭く問題提起していた「市民権の拡張とその内的必然性の限界」という議論が，この間の変化を説明する1つの鍵になるのではないかと思う。

それはさておき，イギリスの社会が危機に頻していることは事実であり，それはイギリス人自身も口にするところである。経済生活が逼迫してゆく中で，先に紹介したような意識がどこまで持続してゆくかは必ずしも明らかではない。しかしまた，イギリスの社会には，何か不思議な安定が感じられることも事実である。この社会はいったいどうなってゆくのであろうか。こうした問題はなかなか興味深いものであり，やはりそこに，巨大な実験が行なわれている，と筆者は思うのである。

English people's sense of life.